

乳腺腫瘍

Mammary Tumor

雌の腫瘍の中で最も多発するものの一つです。犬の場合、乳腺腫瘍の悪性と良性の割合は、ほぼ半々です。猫の乳腺腫瘍は犬とは違い、8割から9割が悪性の乳癌です。すなわち、犬の場合はオッパイにしこりができたら半分が悪性で半分は良性です。これが猫の場合になるとそのほとんどが悪性であるということになります。しかしながら、犬と猫で乳腺腫瘍の発生率をくらべると、猫のほうが犬に比べて1/8程度の低い発生率との報告があります。

犬での発生率は10万頭につき198.8頭で、雌犬の腫瘍のうちの半数が乳腺腫瘍であるという統計さえあります。

原因

原因ははっきりとはしていませんが、腫瘍の種類によっては女性ホルモン(エストロゲンという卵巣から出るホルモン)が関係していると言われています。

症状

腫瘍の発生部位や種類によって多少異なりますが、通常は乳頭周辺などに触ることのできるしこりが存在します。経過が長期の場合は潰瘍を起こしたり、出血したり、二次的な細菌感染を起こしたりして悪臭をはなったりします。脇のしたや内股のリンパ節に転移がみられる場合はその部分が腫れたりしていることがあります。

他の腫瘍に比べると、発熱や痛みは少ないようです。

診断法

一般的な検査で、発見は可能です。2mm以上の腫瘍なら触ればわかりますが、その分類(良性か悪性か)は病理組織検査をしないとわかりません。

また、転移の有無などを確認するためにレントゲン検査(レントゲンで肺の転移を確認しますが、0.5cm以下の腫瘍は見つけることができません。)を行う必要があります。

その他手術に際して全身状態を把握するために、尿検査、血液検査などを行います。

腫瘍の発生している場所にもよりますが、時には手術をする前に、生検といって針を刺し、腫瘍組織の一部を採取してきて病理組織検査を行うこともあります。

乳腺のしこりには腫瘍意外に乳腺炎や乳腺過形成がありますので、それらと見分けることがまず必要です。

治療法

基本的に切除可能であれば外科手術を行うということになります。

外科手術以外の方法として、あるいは手術との併用として、薬剤投与や放射線療法などがありますが、乳腺腫瘍の場合は根本的には外科手術を選択すべきです。

自宅での看護法

治療は獣医師にまかせるしかありません。自宅では、処方された薬をきちんと投与しましょう。外科的手術が可能であるかどうかでその後の様々な対処法が違ってきます。主治医の先生の説明を十分に受けてください。

予防法

乳腺腫瘍の場合は女性ホルモンの関係から避妊手術の時期によってその発生率を抑えることができると言われています。犬の場合は、初めての発情がくる前に避妊手術した犬で乳腺腫瘍のできる確立は1000頭中5頭、1回目の発情の後で避妊手術すると1000頭中80頭、2回目の発情の後で避妊手術すると1000頭中260頭にその発生が見られたとの統計があります。あきらかに早期に避妊手術を行えば予防になります。猫は犬ほどではありませんが、それでも初めての発情以前に避妊手術を行うことは予防になるだろうと言われています。

メモ

腫瘍の大きさと、治療後の生存期間は反比例し、大きければ大きいほど予後は悪いものです。特に猫の乳腺腫瘍の場合は3cm×3cm×3cm、つまり27cub.cm以上の腫瘍は最悪だとされています。とにかく、オッパイにしこりを感じた場合は、すみやかに動物病院で診察をうけることをお勧めします。早期発見早期摘出(治療)が原則です。

また、最近では、乳腺腫瘍ができてからその切除手術とともに可能であれば避妊手術を行ったほうが再発率などを低下させることができるであろうと言われています。



[広告] ▲上記QRコードで携帯から簡単アクセス可能..